深淵をのぞく ― 明治期の浅間山と欧米人登山者

櫻井　文子

はじめに

1900 年 9 月 15 日の『ジャパン・ウィークリー・メイル』は、「浅間山」と題した記事の中で、同山を以下のように紹介している。なお、同紙は明治期に横浜居留地で創刊された英字新聞のひとつであり、『ジャパン・ガゼット』や『ジャパン・ヘラルド』と並ぶ横浜三大英字新聞として、日本に滞在する欧米人を中心に大きな影響力を持った媒体である[1]。

> 確かに外国人たちにもっともよく知られている山だろう。夏のひと時を軽井沢で過ごす、300 人とも 400 人ともつかない外国人たちは、この峰を愛するようになり、共通の話題とすることで彼らの関心を示しているのだ[2]

この記事の後半では、「軽井沢を頻繁に訪れる外国人」を「この上なく喜ばせる」トピックとして、浅間山の火山としての構造や、鬼押出がどのようにしてできたのかに関する推論が展開されている[3]。このように世紀転換期には、日本に、とりわけ東京や横浜に在住する欧米人にとって、浅間山は軽井沢での避暑と並んでなじみ深い存在となっていた。実際、当時英語で刊行された日本の旅行案内書の中でも、浅間山は定番の行楽先に数えられている。例えばイギリスのジョン・マレー社刊行の『日本旅行者のハンドブック』（1891 年）では、浅間山は「日本最大の活火山であるだけでなく、もっとも訪れやすいものでもある」[4] とされている。つまり、明治時代の日本を訪問した欧米人にとって、噴煙を吐く浅間山の山姿を愛でることや山頂に登ることは、日本滞在を彩る定番の要素のひとつとされていたのである。

明治維新から 1890 年代にかけての明治初期は、日本の登山史では近代登山の黎明期とされている[5]。江戸時代に各地に存在した信仰登山の伝統は、明治維新にともなう急激な社会的・文

---

[1] 浅岡邦雄「ハウエル社主時代の『ジャパン・メイル』と明治政府」、横浜開港資料館、横浜居留地研究会編、『横浜居留地と異文化交流−19 世紀後半の国際都市を読む』（山川出版社、1996 年）、298-300 頁。
[2] J. H. De Forest, “Asama,” *The Japan Weekly Mail*, 15 Sept. 1900, p. 285.
[3] *Ibid.*
[4] Basil Hall Chamberlain and W. B. Mason, *Handbook for Traveller in Japan* (London: John Murray; Yokohama et. al.: Kelly & Walsh, 1891), p. 144.
[5] 日本山岳会百年史編纂委員会編『日本山岳会百年史　本編』（日本山岳会、2007 年）、34-75 頁；山崎安治『登山史の周辺』（茗渓堂、1984 年）、90-107 頁。

化的な変化のために断絶・混乱した。その一方で、欧米人の国内旅行が（一定の制限付きで）解禁されると、欧米人による日本各地の山々の登山が始まった。また、そうしたスポーツとしての登山とは別に、国土の測量と調査が進められ、日本の山岳地帯が地図や地質図に捕捉されるようになった。こうした変化を受けて、世紀転換期以降、日本人にも登山文化が広がることになる。イギリス人登山家のウォルター・ウェストン（Walter Weston, 1861-1940）をはじめとする、日本の山々に挑んだ欧米人登山者の体験が日本語でも紹介され、さらに志賀重昂の『日本風景論』(1894 年) のような、山岳の自然美を称揚し登山を勧奨する論者が登場したことによって、日本人にも山岳が登山の対象として認識されるようになり、アルピニズムが興隆したのである[6]。

明治時代、浅間山の位置付けもまた、こうした西洋のスポーツ登山の移入と歩をあわせて変化したと言えるだろう。江戸時代には、浅間山は山そのものが「浅間大神」の神体として信仰されていたため、登山自体、明治時代に入って欧米人によって初めて行われた[7]。そして 19 世紀末には、上述のように避暑地軽井沢から気軽に行ける景勝地として定着したのである。しかし、日本に滞在する欧米人の間で浅間山が「もっともよく知られている山」となったのは、軽井沢からのアクセスの良さだけが理由ではなかった。本稿で改めて確認されたように、浅間山は継続的に活動する活火山として、日本の開国以前からその存在がヨーロッパで知られていた。そのため明治時代になると、欧米人の地質学者や地理学者による学術調査がいち早く進められたのである。

このように、スポーツ登山者だけでなく研究者の関心も早くから寄せられた点が、浅間山の特色と言える。この点では、同山の位置付けは富士山とも近いと言えるだろう。それにも関わらず、登山史における浅間山の扱いは必ずしも大きくはない。富士山については、幕末・明治初期の欧米人による登頂史も明らかにされているが、浅間山については郷土史的な研究があるのみで、体系的な調査はされていない[8]。そこで本稿では、18 世紀後半から 19 世紀末にかけて刊行された英語とドイツ語の欧文史料を中心に、浅間山に関する記述と欧米人による登頂例を改めて整理した。そして、明治期に欧米人研究者による浅間山の学術調査が進められた過程を検証するとともに、同山がとりわけ欧米人に人気の景勝地として確立された背景を考察した。

---

[6] ウェストン（青木枝朗訳）『日本アルプスの登山と探検』（岩波書店、1997 年）；志賀重昂『新装版 日本風景論』（講談社、2014 年）。
[7] 軽井沢町誌刊行委員会編『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』（軽井沢町誌刊行委員会、1988 年）、83 頁。
[8] 同書、82-5 頁。

1. 開国以前の文献における浅間山

19 世紀初頭には、浅間山の存在はすでにヨーロッパで知られていた。とはいえ、言及する文献の数自体は少ない。これは、長崎から近い桜島や霧島山、阿蘇山や雲仙岳といった九州の火山や、オランダ商館長の江戸参府道中で目にすることになる富士山に比べて、情報を入手する機会が少ないためだろう。それにも関わらず、浅間山は富士山と並ぶ本州の代表的な活火山として認識されていた。この節では、そうした開国以前の時期のおもだった欧文文献に登場する、浅間山関連の記述を概観する。

日本列島の火山の多さは、早くからヨーロッパの研究者の認めるところであった。例えば 17 世紀末に長崎の出島に滞在したドイツ人の医師・自然誌家、エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）は、彼の著作『日本誌』（1777-9 年）において、薩摩硫黄島や阿蘇山、雲仙岳などの例を挙げて、日本近海や九州の火山の多さを強調している。彼は富士山についても、かつて火山として活動していた山の例として紹介していることから、火山への関心が高かったことがうかがえる[9]。しかしケンペルは浅間山の存在は知らなかったようで、『日本誌』では言及されていない。

浅間山に関する具体的な記述を含む欧文資料としておそらくもっとも古いものは、18 世紀末に長崎のオランダ商館長を勤めたイザーク・ティチング（Isaac Titsingh, 1745-1812）の著作、『日本風俗図誌』（1822 年）だろう。彼は 1783 年 8 月の天明噴火の時期にちょうど出島に駐在しており、浅間山が「上州」と「信州」の境に位置していることや、被害を受けた村の名前といった詳細かつ具体的な情報を江戸から入手することに成功している[10]。『日本風俗図誌』をはじめとするティチングの著作の多くは彼の死後になって刊行されたが、19 世紀前半、とりわけシーボルト以前の文献に登場する浅間山の詳細は、このティチングが集めた情報に基づいている。

19 世紀前半にフランスで活躍した東洋学者、ユリウス・クラップロート（Julius Heinrich Klaproth, 1783-1835）もまた、伝聞ではあるが浅間山に関する記述を残している。彼は 1830 年に日本の火山に関する論文を、1831 年には東アジア、特に日本と中国の火山を概観した論文を刊行している[11]。どちらにおいても、日本にある 6 つの活火山のひとつとして、富士山や阿蘇

---

[9] Engelbert Kaempfer, *Geschichte und Beschreibung von Japan. Unveränderter Neudruck des 1777-1779 im Verlag der Meyerschen Buchhandlung in Lemgo erschienenen Originalwerks. I. Band* (Stuttgart: F. A. Brockhaus, 1964), S. 120-3.

[10] ティチングは 1793 年の普賢岳の噴火についても記述を残している。(Isaac) Titsingh, *Illustration of Japan* (London: R. Ackermann, 1822); 中山和芳「開国以前、西洋人の見た富士山（下）」、『東京外国語大学論集』第 45 号（1992 年）、99 頁。

[11] [J.] Klaproth, 'Sur les volcans du Japon,' *Annales de chimie et de physique* 14 (1830): 348-54; [J.] Klaproth, 'Pheénomènes volcaniques en Chine, au Japon et dans d'autres parties de l'Asie orientale, par M. J. Klaproth,' Alexander von Humboldt, *Fragmens de géologie et de climatologie asiatique* (Paris: Gide, 1831), pp. 195-235.

山と並んで浅間山が紹介されており、さらに 1783 年の天明噴火の被害の大きさに言及している。上記 2 点の論文における浅間山に関する記述は、ティチングの著作に基づいていると考えられる。クラップロートは、ティチングがオランダ語に翻訳した林鵞峰（1618-1680）の歴史書、『日本王代一覧』をフランス語訳し、林以降の歴史や追加情報を増補したものを刊行した人物である[12]。この点からも、彼がティチングの著作を読んでいたと判断して良いだろう。

19 世紀前半に長崎のオランダ商館の医師として来日した医師・自然誌家フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796-1866）の著作、『日本』（1832-54 年）の図録には、他の日本の山々とともに浅間山の図版も収録されている[13]。しかし、この図版に対応する本文第 1 巻には、浅間山に関する記述はない。実は『日本』には、他にも図版が本文の記述から乖離している箇所が少なくない。もっともこの浅間山の図版については、シーボルトが直接目にした風景を描いたものではなく、日本の出版物から転載したものであるため、説明がないと考えられる。図版の浅間山は、彼が日本滞在中に入手した谷文晁の『名山図譜』（1804 年）に収録されている図を、石版画を描き起こしたものなのである[14]。

しかしシーボルトは、日本滞在中に浅間山に関するかなり具体的な情報を入手していたようである。というのも、自然誌家・地理学者のアレクサンダー・フォン・フンボルト（Alexander von Humboldt, 1769-1859）が晩年に刊行した自然地理学の大著、『コスモス』（1842-62 年）には、彼がシーボルトから得た情報に基づくとされる浅間山の説明が含まれるからである。『コスモス』の第 4 巻（1858 年）には、フンボルト曰く、シーボルトから提供された研究成果に基づく日本列島の火山に関する記述がある[15]。それによれば、日本には活火山は 6 つあり、その内 2 つは本州に、残り 4 は九州にあるという[16]。本州の 2 つの活火山とは、富士山と浅間山であるが、後者は本州「内陸にある活火山のうち、もっとも中心に位置している」と紹介されている[17]。こうした活火山の数と分布はクラップロートのものと変わらないが、フンボルトによる浅間山の説明には、これまでの文献にはない情報が 2 つ含まれる。ひとつは、天明の噴火の他にも、浅間山が 864 年に富士山と同時に噴火したと述べられている点である[18]。この 864 年の富士山の

---

[12] Johannes Klatt, ‘Klaproth, Julius,’ in: *Allgemeine Deutsche Biographie*, Bd. 16 (Leipzig: Duncker und Humblot, 1882), S. 51-60；*Nipon o daï itsi ran, ou annales des empereurs du Japon* (Paris/London: Parbury, Allen and co., 1834).
[13] フィリップ・フランツ・シーボルト（中井晶夫、八城圀衛訳）『日本 図録 第一巻』（雄松堂書店、1978 年）、［22］I 第 8 図(c)。
[14] 宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の山々と谷文晁『名山図譜』」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第 4 巻（2006 年）、39-43 頁、62-3 頁。
[15] Alexander von Humboldt, *Kosmos. Entwurf Einer Physischen Weltbeschreibung. Vierter Band* (Stuttgart und Augsburg: J. G. Cotta, 1858), S. 397.
[16] 本州の活火山としては浅間山と富士山が、九州の活火山としては桜島、霧島、阿蘇山、雲仙岳の名前が上がっている。*Ibid.*, S. 399.
[17] *Ibid.*
[18] *Ibid*.

噴火は、貞観噴火として知られるものだが、この時に浅間山が噴火した事実はないため、何らかの事実誤認がされたと考えられる。もうひとつは、浅間山の位置が、「緯度〔北緯〕36 度 22 分、経度〔東経〕136 度 18 分、つまり 2 つの首都である京都と江戸の子午線の中間にある」と、具体的な数値をともなって記載されている点である[19]。この数値は、実際のものより緯度・経度ともにずれているが、日本滞在中にシーボルトが何らかの手段で測量結果を入手した可能性があることを示している。

なお、19 世紀前半の代表的な火山学者であったイギリスのプーレット・スクロープ（George Julius Poulett Scrope, 1797-1876）の研究には、日本の火山に関する記述はあるものの、浅間山の名前は登場しない。1825 年の著作『火山についての考察』では、ケンペルの名を挙げて、日本列島の活火山は 10 であり、その内 3 つは本州にあると述べている[20]。ケンペルの著作には浅間山に関する記述は登場しないため、スクロープもまたそれにならったものと思われる。1862 年に刊行された著作の『火山』では、スクロープは日本の活火山の数を 6 に修正しており、2 つが本州に、そしてなぜか「5 つ」が九州にあると述べている[21]。この記述には典拠は記載されていないが、活火山の数や分布がほぼ一致していることから、クラップロートまたはフンボルトの『コスモス』に依拠していると考えられる。

2. 「崇高」の美学と学術調査の開始

18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて刊行された欧文文献では、浅間山についての情報はすべてが伝聞によるものだった。実地での調査は、明治時代に入り外国人の国内旅行が可能になってはじめて行われたのである。シーボルトやフンボルト等の記述によって、浅間山が本州の代表的な活火山とされたこともあり、以下に見るように同山の登頂と調査は富士山に次ぐ早い時期に行われたのである。

ちょうど開国以降の数十年間が浅間山の火山活動の休止期と重なっていたことも、欧米人による浅間山の登頂を後押しした。当時の浅間山の噴火回数は〔表 1〕にまとめた通りだが、明治初期の 1869 年に 4 度噴火した後は、1875 年に 1 度、1879 年に 2 度噴火しているだけである。加えて 1800 年代の浅間山では、死者をともなう噴火被害は記録の上では 1 度も発生していな

[19] 浅間山の正確な位置は北緯 36 度 24 分 23 秒、東経 138 度 31 分 23 秒である。*Ibid*.

[20] ケンペル以外の研究は挙げられておらず、具体的な火山の名前も記載されていないため、スクロープが日本の活火山の数を 10 とした理由は不明である。George Poulett Scrope, *Considerations on Volcanos. Leading to the Establishment of a New Theory of the Earth* (London: W. Phillips, 1825), p. 257.

[21] 九州の活火山の数は誤植であると考えられる。George Poulett Scrope, *Volcanos* (London: Longman, Green, Longmans, and Roberts, 1862), p. 459.

表 1　浅間山の噴火回数と死者数（1868-1912 年）

年	回数	死者数
1868		
1869	4	0
1870		
1871		
1872		
1873		
1874		
1875	1	0
1876		
1877		
1878		
1879	2	0
1880		
1881		
1882		
1883		
1884		
1885		
1886		
1887		
1888		
1889	1	0
1890		

年	回数	死者数
1891	5	0
1892		
1893		
1894	23	0
1895		
1896		
1897		
1898		
1899	9	0
1900	33	0
1901	24	0
1902	2	0
1903	2	0
1904	1	0
1905		
1906	1	0
1907	3	0
1908	5	0
1909	8	0
1910	10	0
1911	**46**	>3
1912	16	0

1868 年から 1910 年まで、噴火による死者は発生していない。1911 年には、5 月 8 日の噴火で 1 名、8 月 15 日の噴火で少なくとも 2 名が死亡、十数名が負傷している。出典：気象庁「浅間山　噴火回数表（1868～2019 年）」https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/306_Asamayama/306_er_count.html（最終閲覧日：2021 年 6 月 14 日）；早川由紀夫、中島秀子「史料に書かれた浅間山の噴火と災害」、『火山』、第 43 巻、第 4 号（1998 年）、213-21 頁。

い[22]。20 世紀初頭に同山は再び活動期に入るが、1911 年 5 月 8 日になって初めて、登山者が噴火に巻き込まれて死傷しているのである[23]。つまり、浅間山が百年以上に渡って穏やかな火山活動しか示さず、さほど危険視されなかったことも、日本に滞在する欧米人による登頂が積極

[22] 早川由紀夫、中島秀子「史料に書かれた浅間山の噴火と災害」、『火山』第 43 巻、第 4 号（1998 年）、218 頁。
[23] *Ibid.*

的に行われた理由と言えるだろう。

記録に残る中でもっとも早い時期に浅間山に登った欧米人は、1870 年 5 月 14 日から 16 日に追分に滞在し、おそらくは 15 日に浅間山に登頂した、イギリス公使のハリー・パークス（Harry Smith Parks,1828-1885）と彼の妻ファニーである[24]。ちょうど同月に横浜居留地で創刊された、隔週刊行の英文雑誌『ファー・イースト』の第 1 号には、パークス夫妻の日光・浅間山への旅を報道する短い記事が掲載されている。なお、この記事には夫妻が最初の登頂者であるとは述べられていないことから、それ以前に浅間山に登った者が存在する可能性がある[25]。この『ファー・イースト』誌の記事によれば、パークス一行の山頂までの道のりは、相当ハードなものだったようである。「火口から噴き出す硫黄を含む煙のために非常に不愉快」な思いをしただけでなく、「砂と細かな火山放出物のために足場がまったく安定せず、全員にとって登頂は非常に疲労するものだった」という[26]。

非常に短いものであるにもかかわらず、このパークス夫妻の登頂報道からは、これ以降に浅間山に登った欧米人登山者の叙述に共通して見られる 2 つの要素を確認することができる。ひとつは、活火山登山への挑戦が、少なくないリスクをともなう冒険として了解されていたことである。この時も、浅間山の火山活動が近年活発になっているとの噂があったため、一行の登頂は「絶対に危険であるとは言えない」ものの、安全とはほど遠いものだった。そしてもうひとつは、火山活動の熱とエネルギーを間近に見ることで引き起こされる、自然の猛威に対する恐れである。この記事では、火口をのぞき込んだ一行は「壮大な光景」に「畏怖の念」を感じた、という紋切り型の表現であらわされているものの、彼らが目にした光景に圧倒されたことには変わりはないだろう[27]。

1870 年代前半は、日本に滞在する欧米人たちの間で、国内旅行に関するノウハウが急速に蓄積されていった時期である。そうした情報交換の舞台として重要な役割を果たしたのが、横浜や東京の外国人居留地で形成されたクラブや協会といった自発的結社である。例えば横浜では、1863 年に横浜ユナイテッド・クラブ（Yokohama United Club）とジャーマン・クラブ（Club Germania）が、それぞれ英語圏とドイツ語圏の出身者のための社交クラブとして創立された[28]。

---

[24] ‘Current Items,’ *The Far East. An Illustrated Fortnightly Newspaper*, 1 (1) (30 May 1870), : 7-8; 『軽井沢町誌歴史編（近・現代）』、82-3 頁。

[25] 幕末から明治初期に日本国内で積極的に登山をした欧米人としては、オルコックやガウランド、サトウが知られている。ガウランドは登山活動について史料を残していないため、彼が浅間山に登ったかを確認することは困難である。オルコックは日本滞在時の経験を著書『大君の都』にまとめているが、同書では富士山の登頂についてのみ述べられていることから、浅間山には登っていないと考えられる。サトウについては後述する。Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, 2 vol. (London: Longman, Green, Longman, Roberts, & Geen:1863).

[26] ‘Current Items,’ p. 8.

[27] *Ibid.*

[28] 橋爪紳也「倶楽部の成立」、福田アジオ編『結衆・結社の日本史』（山川出版社、2006 年）、233-4 頁。

そして 1872 年には、日本に関する学術研究を目的とした学術団体としては最古のものである、日本アジア協会（Asiatic Society of Japan）が、1873 年には日本を含む東アジア地域の学術研究を目的とする、ドイツ東洋文化研究協会（Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiend）が発足している[29]。こうした場では、会員同士の会話や下記に紹介するような講演、刊行物などを介して、日本に関する様々な情報が共有され蓄積されていったのである。

東京から浅間山までのアクセスについても、先駆者が持ち帰った情報によって次第に全容が明らかになってゆく過程を、この時期には確認することができる。例えば 1874 年には、オランダの工兵隊所属の士官であるリンドー（J. A. Lindo）という人物が、東京から新潟まで中山道と北陸道を通って旅した際の見聞を、日本アジア協会で報告している[30]。リンドーは浅間山には登っていないが、彼の報告では当時の浅間山までの旅路が具体的に紹介されているので、ここで簡単に取り上げたい。なお、このリンドーの報告のような、旅行案内的な性格も持つ学術論文は、当時の日本アジア協会やドイツ東洋文化研究協会の会報に数多く掲載された[31]。こうした記事では、同じルートを利用する欧米人の助けとなるように、道路の状態や利用できる交通手段、さらには道中の風光明美な場所や植生などが詳細かつ具体的に描かれるのが通例だった。

そのリンドーの報告によれば、当時東京から浅間山の麓までは約 2 日を要した。東京から 1 泊目の宿泊地となる高崎までは中山道を進むが、この区間は道幅も広く路面の状態も良いため、馬車や人力車で快適に移動することができる。さらに深谷と本庄の間は、耕地や農家、木立が織りなす牧歌的な風景が美しいため、旅路を楽しむことができるという。2 日目は、中山道有数の難所である碓氷峠を越えることになるが、当時、馬車の通行が可能な道路は高崎までしかなかったため、高崎から碓氷峠手前までは人力車を使うことになる。碓氷峠越えは、籠に乗るか徒歩で進む他はない険しい道のりだが、リンドーが訪れた 5 月にはあたりにヤマフジやツツジが咲き、絵のように美しい光景を楽しむことができたとも述べられている[32]。馬車や鉄道を利用することに慣れた欧米人にとっては、このような人力車や徒歩での移動を余儀なくされる旅は不便なものであり、旅先では西洋風の食事や宿泊施設もないため、快適とは言い難い旅路であった。しかしこうしたアクセスの悪さは、1880 年代中頃以降に鉄道や新道の建設が進んで

---

[29] Carl von Weegmann, *85 Jahre O.A.G.* (Wiesbaden: Kommissionsverlag Otto Harrassowitz, 1961), S. 5-6; Rolf-Harald Wippich「Max von Brandt und die Gründung der OAG (Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens) – Die erste deutsche wissenschaftliche Vereinigung in Ostasien」、『ドイツ語圏研究』、第 11 巻（1993 年）、67 頁；"Gründung der Gesellschaft 22. März 1873," *Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 1(1) (1873): 1.

[30] J. A. Lindo, "Description of a Trip to Niigata, along the Shinshiu-road and back by the Mikuni Pass," *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 3 (1874): 48-80.

[31] 例えば J. J. Rein, "Naturwissenschaftliche Reisestudien in Japan," *Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 1(6) (1874): 60-1; Niewerth, "Eine botanische Excursion im Monat August von Yedo nach Nikko," *Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 1(7) (1875): 9-11.

[32] Lindo, "Description of a Trip to Niigata," pp. 48-54.

交通事情が急速に改善し、さらに欧米人による観光旅行が一般化するまでは変わることはなかった。

欧米人研究者による浅間山の学術的な調査は、1870 年代の中頃以降に相次いで行われた。よく知られているものとしては、当時東京の工部大学校の教授を務めていたイギリス人の地質学者、ジョン・ミルン（John Milne, 1850-1913）による調査がある[33]。彼は 1877 年と 1886 年に登頂しているが、2 度目の登山時には測定器具を持参し、火口の大きさの測定や火山ガスの成分の分析を試みたものの、思うような成果を得られずに終わっている[34]。しかしミルンが初めて登頂した 1877 年の時点で、実はすでに何人もの地理学者や地質学者の手によって、浅間山の調査報告が論文として刊行されていたのである。

その中で登頂時期、刊行時期ともにもっとも早いものは、1874 年 7 月 26 日に浅間山に登ったドイツ人の地理学者、ヨハネス・ユストゥス・ライン（Johannes Justus Rein, 1853-1918）の調査報告だろう[35]。ラインは、日本の漆塗り技術をドイツに取り入れることを狙ったプロイセン王国政府の命を受けて、1874 年から 75 年の 2 年間、日本に派遣された人物である[36]。彼は日本各地で伝統工芸の調査を進めたが、その際には、自身の任務である漆器製作技術の研究調査の傍ら、動植物や地質、風俗や信仰などについても幅広く情報を収集した。この時の研究成果を後年まとめたものが、彼の代表的な著作であり、日本に関する初めての本格的な地理学研究とされる『日本』（1881 年・1886 年）である[37]。なお、帰国後ラインは、日本の専門家としてマールブルク大学の地理学教授の職を得ている[38]。

そのラインが浅間山を訪れたのは、東京から近畿、北陸を巡った後、北国街道と中山道経由で東京に戻る途上である[39]。この調査旅行では、同じドイツ人の気象学者・地図製作学者のエルウィン・クニッピング（Erwin Rudolf Theobald Knipping, 1844-1922）が、各地でラインが標高を

---

[33]『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』、83-4 頁。ミルンについては、金光男「お雇い外国人地質学者の来日経緯（13）英人地震学者ミルン–完結編その I」、『地学教育と科学運動』第 74 号（2015 年）、71-9 頁等も参照。

[34]『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』、83-4 頁。

[35] J. J. Rein, “Dr. J. Rein’s Reise in Nippon, 1874,” *Mittheilungen aus Justus Perthes’ geographischer Anstalt* 21 (1875): 214-22; Matthias Koch u. Sebastian Conrad (Hg.), *Johannes Justus Rein. Briefe eines deutschen Geographen aus Japan, 1873-1875* (München: Iudicum, 2006), S. 258.

[36] 山田直利、矢島道子「J. J. ライン著『ライン博士の 1874 年日本旅行』邦訳」、『地学雑誌』、第 127 巻、第 6 号（2018 年）、806 頁 ; Ursula von den Driesch, “Rein, Johannes Justus” in: *Neue Deutsche Biographie* 21 (2003), S. 341-2.（URL: https://www.deutsche-biographie.de/pnd118599313.html#ndbcontent）（最終閲覧日：2021 年 6 月 25 日）。

[37] J. J. Rein, *Japan nach Reisen und Studien im Auftrag der Königlich Preussischen Regierung Dargestellt*, 2 Bände (Leipzig: Wilhelm Engelmann, 1881, 1886).

[38] 山田、矢島「J. J. ライン著『ライン博士の 1874 年日本旅行』邦訳」、806 頁 ; von den Driesch, “Rein, Johannes Justus,” S. 341-2.

[39] Rein, “Dr. J. Rein’s Reise in Nippon, 1874,” S. 214.

測定する際に協力している[40]。通訳の三田佶（1851-1923）を含むライン一行が小諸に到着したのは 7 月 25 日であり、翌 26 日にラインは案内人とともに小諸から浅間山に登り、火口の縁まで赴いている[41]。

翌 1875 年にドイツの地理学雑誌に掲載された論文、「ライン博士の 1874 年日本旅行」は、この時の旅行の調査結果をまとめたものである。そこでは小諸から浅間山に至る道程の地形や植生、湧水の水温や山頂までに経由するポイントの標高などが詳細に記録されている[42]。また、浅間山が 2 つの外輪山を持つ三重式の火山であることを学術誌で初めて報告したのは、この論文である可能性が高い[43]。同論文には、後述のマーシャルやドラッシェなど、19 世紀後半に出版された浅間山に関する研究も言及していることから、同山の地理学的な基礎研究として評価されていたことが分かる。

パークス夫妻の時とは異なり、ラインは風向きにも案内人にも恵まれたようで、小諸からの登山を彼は「容易である」と評している。麓から湯の平（現在の浅間火山である前掛山とその外輪山である黒斑山に挟まれた鞍部）までの道は「草の生い茂る、幅広い段丘」を通るものであり、そこから前掛山の山頂までは、火山礫や軽石が堆積する斜面を登ったと述べられている[44]。このことから、火山灰が堆積した斜面を登ったパークス夫妻とは異なるルートをたどったと考えられる。

その一方で、両者の登山体験には共通する要素もある。ラインが噴煙を吹き上げる釜山（前掛山の火口壁の内側にある、現在活動中の火山）の火口をのぞきこんだ際の心象は、「畏怖」を感じたというパークス夫妻のものと近い。ラインはこの時の経験を「この現象全体の光景、激しいどよめきととどろき、空気の振動と足下の不安定な地面：これらのすべてが、滅多にない恐怖と不安の感情を引き起こした」と振り返っている[45]。淡々とした散文的な記述が続く論文の中で、彼が心情を吐露しているのはこの一節だけであるため、異彩を放っている。このことから、初めて目の当たりにした火山活動の迫力が、いかに強烈な印象をラインに与えたかがわかるだろう。登山の翌々日、東京に戻ってから妻に送った手紙の中では、ラインは釜山で感じ

---

[40] 具体的にラインの旅のどの部分にクニッピングが同行したかについては、今後の調査が待たれる。日本山岳会百年史編纂委員会編『日本山岳会百年史』（日本山岳会、2007 年）、42 頁。; J. J. Rein, *Die Nakasendô in Japan. Nach eigenen Beobachtungen und Studien im Anschluss an die Itinerar-Aufnahme von E. Knipping und mit Benutzung von dessen Notizen* (Gotha: Justus Perthes, 1880).

[41] Rein, “Dr. J. Rein’s Reise in Nippon, 1874,” S. 221-2; 山田、矢島「J. J. ライン著『ライン博士の 1874 年日本旅行』邦訳」、806 頁。

[42] Rein, “Dr. J. Rein’s Reise in Nippon, 1874,” S. 214-22; 山田、矢島「J. J. ライン著『ライン博士の 1874 年日本旅行』邦訳」、818 頁。

[43] Rein, “Dr. J. Rein’s Reise in Nippon, 1874,” S. 214-22; 山田、矢島「J. J. ライン著『ライン博士の 1874 年日本旅行』邦訳」、818 頁。

[44] Rein, “Dr. J. Rein’s Reise in Nippon, 1874,” S. 214-22; 山田、矢島「J. J. ライン著『ライン博士の 1874 年日本旅行』邦訳」、818 頁。

[45] Rein, “Dr. J. Rein’s Reise in Nippon, 1874,” S. 222.

た恐さを率直に吐露している。

> 僕がここで見て、聞いて、そして感じたことは、忘れることなどできないだろう。心を揺さぶられて、急に不安と身の毛のよだつような恐怖で一杯になったよ。最後の急な斜面の麓では、遠くにある巨大な滝の水音のように上から響いていたものが、とてつもなく大きな火口をのぞき込むところまで行くと、雷のようなとどろきと轟音も加わって地面がブルブル震えるほどになって、今にも足下から崩れ落ちるのではないかと思ったよ[46]。

そしてパークス夫妻同様、ラインの登頂も安全とは言いがたいものだった。彼らは、後少しで高温の火山ガスで火傷をするところだったようで、危機一髪だったとラインは手紙の中で認めている。

> 僕たちがつい数分前に踏み越えたばかりの足場の数カ所から高温の蒸気が吹き出して、こちらへ押し寄せてきたから、それ以上の滞在は危険になったんだ。案内人は早く戻るべきだと強く訴えてきたよ[47]

ところがこのように危険な目に遭いながらも、ラインは他の者が浅間山に登ることを止めはしなかったようである。翌年の 1875 年 7 月 22 日に再び中山道を信濃方面に向かう際に、ラインは追分に宿泊しているが、この時には、同道していたドイツ財務省の試補（官職に任命される前の見習い期間中の者）のケーニヒスという若い男性が浅間山に登っているのである[48]。なお、脚の具合を悪くしていたラインは追分の宿に残り、登山はケーニヒスだけがしている。ラインが年若い同行者の登頂を止めなかったのは、「壮大な自然現象」[49] を体験する貴重な機会には、その危険に見合う価値があると考えたためではないだろうか。

そもそも日本列島の地震や火山活動の多さは、こうした現象に馴染みの薄いヨーロッパ出身者にとって、好奇心をそそられる事象だった。「『ああ、地震を体験してみたいねえ！』というのが、日本に到着したばかりのヨーロッパ人が最初に言いがちなセリフのひとつだ」と、東洋学者のバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）が『日本事物誌』(1981 年）で書いているように、怖さよりも物珍しさが先に立つのが欧米人の一般的な反応だった[50]。

---

[46] Matthias Koch u. Sebastian Conrad (Hg.), *Johannes Justus Rein. Briefe eines deutschen Geographen aus Japan, 1873-1875* (München: Iudicum, 2006), S. 258.
[47] *Ibid.*, S. 259.
[48] *Ibid.*, S. 376-7.
[49] *Ibid.*, S. 259.
[50] Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese. Being Notes on Various Subjects Connected with Japan* (London: Kegan

もっとも地震については、3 度 4 度と経験するうちに、その本当の恐ろしさを実感し忌避するようになるのが通例だったという[51]。しかし明治期の日本の火山は、1888 年に磐梯山が噴火するまで大規模な被害を引き起こすことはなかった。そのこともあり、自然の雄大さを体感できるスリリングな場所として、日本を訪れる欧米人の間で火山見物は人気を博したのである。例えば箱根の大涌谷が、箱根の外国人保養地化とともに早くから観光名所として定着したのもそのためである[52]。大涌谷の「荒涼とした渓谷」は、「我々が歩いている薄い地面の直下で煮たぎる熱湯の響き」を体感できる珍しくも迫力あるスポットとされた[53]。磐梯山が 1888 年に噴火した際でさえ、火山見物に詰めかける欧米人がいた。当時東京に住んでいたイギリス人ジャーナリストのヘンリー・ノーマン（Henry Norman, 1858-1939）もその 1 人であり、噴火の知らせを受け取るやいなや、友人数名と共に現地に急行し、できたばかりの噴火口に登って中をのぞいているのである[54]。

こうした怖いもの見たさとも言える欧米人観光客の行動の背景には、自然の壮大さを魅力的なものとして肯定的に評価するロマン主義的な「崇高」の美学が、通俗化し余暇活動に溶け込んだかたちで存在していたと言えるだろう。均整美を旨とする古典主義的な美的観念への批判として、ヨーロッパで 17 世紀末から 18 世紀にかけて興隆したロマン主義的な美的観念においては、広大無辺な山や嵐、地震や火山の噴火といった人間を圧倒する事象は、自然の荒々しい美しさを体現し、見る者の心をその「崇高さ」で震撼させるものとして、その美的価値が称揚されたのである[55]。そしてこうした自然の猛威を体験するためにある程度の危険を冒すことは、そうした体験の価値を高める要素とみなされていた。実際、箱根の大涌谷についても、「薄い地表の割れ目で命を落とした旅行者はひとりではない」、危険と隣り合わせの場所であるからこそ、「小規模の火山活動を観測する素晴らしい機会」と評されているのである[56]。

3. 1870 年代の浅間山調査の進展

1870 年代の後半には、英語やドイツ語の浅間山登頂報告の刊行が続いた。ラインの登頂の翌

Paul, Tench, Trübner & Co., Tokyo: Hakubunsha, 1890), p. 98.

[51] *Ibid.*

[52] 斎藤功「わが国最初の高原避暑地宮ノ下と箱根―明治期を中心に」、『人文地理学研究』、第 18 巻（1994 年）、133-61 頁。

[53] H. B. Tristram, *Rambles in Japan: The Land of the Rising Sun* (London: The Religious Tract Society, 1895), pp. 148-52.

[54] Henry Norman, *The Real Japan: Studies of Contemporary Japanese Manners, Morals, Administration, and Politics* (London: T. Fischer Unwin, 1892), pp. 239-73.

[55] M. H. ニコルソン（小黒和子訳）『暗い山と栄光の山』（国書刊行会、1989 年）。

[56] Tristram, *Rambles in Japan*, p. 152.

年の 1875 年には、お雇い外国人として来日したイギリス人数学者のデイヴィッド・ヘンリー・マーシャル（David Henry Marshall, 1848-1932）が、7 月下旬頃に浅間山に登っている。登頂の正確な日付は不明だが、ラインがケーニヒスとともに追分に滞在した時期とほぼ同じ頃と考えられる。当時工部省工学寮（後の工部大学校）の教員だったマーシャルが浅間山を訪れたのは、開成学校の教員を勤める知人と、おそらくは通訳として同行した開成学校の学生とともに東京から京都へ向かう旅の途中である。マーシャル一行もまた、東京から中山道を進んで高崎で 1 泊したが、ラインとは違い、軽井沢を拠点にして浅間山に登っている。なお、彼らはその後北陸に抜け、琵琶湖を経由して京都に至った後、東京に戻っている[57]。

帰京後、マーシャルはこの旅行について、翌年横浜の日本アジア協会で報告している。この報告は、浅間山火口で計測した噴気の温度など、多少の調査結果も含むものの、旅行体験記的な性格が強く、とりわけ中山道と浅間山に関する部分の内容は、前年のリンドーの報告記事を補足することを意識したものとなっている[58]。登山当日、一行は軽井沢から沓掛（現在の中軽井沢）までは人力車で移動し、そこからは事前に手配しておいた馬で 5 マイルほど登り、山頂までの最後の部分だけ徒歩だった[59]。マーシャルの記述にはラインのような心情描写はないが、彼もまた以下のように危険を冒して火口をのぞきこんだことは確認できる。

> 新しい活動中の火口は巨大な穴（ざっと推測して直径 600 フィート以上）をなしているが、水蒸気とガス化した硫黄ですっかり満たされており、とても大きな音でとどろいている。火口の縁には大きな亀裂が入っており、そこには岩が、眼下の溶けた岩の塊の中に今にも落ちそうな、とても不安定な状態でひっかかっている[60]。

このようにマーシャルの記述からも、火山活動の壮大さを体感するために、リスクは承知の上で火口ギリギリまでおもむくことが、欧米人の浅間山登山の流儀として定着していたことがわかる。

日本列島の地質学的研究のパイオニアとして有名な地質学者・古生物学者エドムント・ナウマン（Heinrich Edmund Naumann, 1854-1927）もまた、来日からさほど時を置かずに浅間山に登っている。彼が日本に到着したのは 1875 年 8 月 17 日のことであるが、その数ヶ月前の 6 月には浅間山が噴火し、東京でも降灰があった。同年の 11 月 4 日に、ナウマンは第 1 回の地質調査旅

---

[57] D. H. Marshall, “Notes of a trip from Yedo to Kioto via Asama-yama, the Hokurokudo and Lake Biwa,” *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 1 Series 4 (1876): 152-74.
[58] *Ibid.,* pp. 152-74.
[59] *Ibid.,* pp. 160.
[60] *Ibid.,* pp. 161.

行に出発するが、この旅行の目的のひとつは浅間山の登山であった[61]。この時ナウマン一行が浅間山までたどったルートは、1875 年のラインの旅とほぼ同じである。彼らは東京から高崎までは馬車で移動し、高崎で 1 泊している。そして翌日に碓氷峠を通って追分に到着し、追分から浅間山に登っている[62]。

しかしナウマンは、この時の登頂経験については書き残していない。彼は 1878 年、東京のドイツ東洋文化研究協会の会報に「日本における地震と火山噴火について」と題した論文を発表している[63]。その中では浅間山も取り上げられているものの、それは日本の古い文献に登場する過去の噴火記録を整理し列記した上で、天明噴火当時の状況を概観し、翻訳した幕府宛の報告書を付記したものである。また、1893 年に刊行された論文、「フォッサマグナ」では 1875 年の調査旅行に言及されているが、ここでもナウマンは、「浅間山に登山した」と述べるにとどめ、詳しい記述はしていない[64]。例えば富士山や鳥海山などといった、他の日本の火山の登頂経験については、山頂からの眺望や山岳信仰の信徒たちの印象も交えた臨場感のある描写がされているだけに、浅間山に関する記述の欠如は対照的である[65]。ひとつ理由として考えられるとすれば、他の研究者の論文との内容の重複を避けたということだろう。ナウマンの登頂は 1875 年 11 月と時期的にはかなり早かったものの、その時点ですでにラインやマーシャルが登頂済みだった。さらには下記のドラッシェも翌年に登山するなど、1870 年代後半は浅間山を対象とする調査や研究論文の刊行が相次いだ時期だったのである。

オーストリア人の実業家であり、また地質学者でもあるリヒャルト・フォン・ドラッシェ（Richard von Drasche-Wartinberg, 1850-1923）は、1876 年に日本に約 3 ヶ月間滞在し、関東・中部・東北地方の各地で地質学的な調査を行った[66]。その一環として彼は火山の登頂と調査も行い、その知見を地質学の専門誌に 1877 年に掲載された論文、「日本の火山である浅間山、焼山、巌鷲山、富士山についての所見」にまとめている[67]。ドラッシェが浅間山に登った正確な日付は

---

[61] エドムント・ナウマン「フォッサマグナ」、ナウマン（山下昇訳）『日本地質の探究：ナウマン論文集』（東海大学出版会、1996 年）、333-4 頁；矢島道子『地質学者ナウマン伝－フォッサマグナに挑んだお雇い外国人』（朝日新聞出版、2019 年）、33-7 頁。

[62] ナウマン「フォッサマグナ」、333-4 頁。

[63] エドムント・ナウマン「日本における地震と火山噴火について」、ナウマン（山下昇訳）『日本地質の探究：ナウマン論文集』（東海大学出版会、1996 年）、23-89 頁。

[64] ナウマン「フォッサマグナ」、333 頁。

[65] この論文は 1887 年にイギリスの王立地理学会の会報に掲載された。エドムント・ナウマン「日本の自然地理および日本人についての短評」、ナウマン（山下昇訳）『日本地質の探究：ナウマン論文集』（東海大学出版会、1996 年）、267-8 頁。

[66] Richard von Drasche, “Zwei geologische Reisen quer durch die Insel Nippon (Japan),” *Neues Jahrbuch für Mineralogie, Geologie und Paläontologie* (1879): 41-53; Ferdinand von Hochstetter, “Jahresbericht des Präsidenten der geographischen Gesellschaft,” *Mittheilungen der kaiserlichen und königlichen geographischen Gesellschaft in Wien* 18 (1875): 29.

[67] Richard von Drasche, “Bemerkungen über die japanischen Vulkane Asama-Yama, Jaki-Yama, Iwa-wasi-Yama und Fusi-Yama,” *Tschermaks mineralogische und petrographische Mittheilungen* 7 (1) (1877): 49-60.

不明だが、旅程から考えて 6 月の上旬か中旬である可能性が高い[68]。彼は前年のケーニヒスやナウマン同様、追分から浅間山に登頂している。そしてライン同様、登山は「辛いものではない」と評しており、「容易に」日帰りできるとしている。

ドラッシェもまたライン同様、浅間山は三重式の火山であるという所見を示しており、論文には第一外輪山（剣ヶ峰）、第二外輪山（前掛山）、釜山と石尊山の位置関係を示す図も付けられている。〔図 1〕ただし、ドラッシェは石尊山を寄生火山とは考えず、第二外輪山が何らかの作用で崩落した名残とみている[69]。同様に、図中で「ビョウボイシ（ビョウブイシ？）」と示されている隆起（二段重になっていることから、おそらく仏岩である）もまた、第一外輪山の一部であると考えている[70]。

ドラッシェもまた例にもれず、釜山の火口壁に立ちその底をのぞこうとした。

図 1 ドラッシェによる、南から見た浅間山の図

第一外輪山の剣ヶ峰、第二外輪山の前掛山（図の a）、噴煙を上げる釜山、そして石尊山、仏岩と思われる隆起（ビョウボイシ）の位置関係が示されている。

出典：Richard von Drasche, “Bemerkungen über die japanischen Vulkane Asama-Yama, Jaki-Yama, Iwa-wasi-Yama und Fusi-Yama,” *Tschermaks mineralogische und petrographische Mittheilungen* 7-1(1877): 51.

---

[68] ドラッシェは 1876 年 6 月 6 日に横浜に到着し、そのしばらく後に地質調査旅行に出発し、8 月 19 日に横浜に戻っている。調査旅行は約 10 週かかっており、浅間山には旅程の 3 日目前後に登っていることから、遅くとも 6 月中旬であったと考えられる。Luke Gartlan, *A Career of Japan: Baron Raimund von Stillfried and Early Yokohama Photography* (Leiden/Boston: Brill, 2016), p. 179.

[69] von Drasche, “Bemerkungen über die japanischen Vulkane,” S. 51.

[70] 正確には仏岩は第二外輪山の一部ではなく、現在の剣ヶ峰や黒斑山を形成した火山体である黒斑山が噴火後山体崩落をした後に活動した、別個の火山体である。*Ibid.*; 軽井沢町誌刊行委員会編『軽井沢町誌 自然編』（軽井沢町誌刊行委員会、1987 年）、33-57 頁；「浅間山北麓ジオパーク」（https://mtasama.com）（最終閲覧日：2021 年 6 月 25 日）。

火山礫の丘を登りつめると、ごうごうと音を立てる火口の縁に出るが、火口からは激しい蒸気が吹き上がり、集まって白い塊をなしている。垂直に切り立つ火口の内壁はかなり白くなっており、多くの箇所は表面が硫黄の結晶でおおわれていて、せり出しているところもあれば、ずたずたに亀裂が走っているところもある。どの裂け目からも高温の蒸気が勢いよく吹き出しているのが見えた。濃い蒸気に阻まれて、火口は時折わずかにしか見ることができないため、その底を見ることは叶わなかった[71]。

ドラッシェは、浅間山の過去の噴火については、ナウマンが日本の古文書を調査中であり、これから研究成果を発表するだろうと述べている[72]。このことから、日本滞在中のドラッシェにナウマンと接触する機会があったことがうかがえる。その結果として、それぞれの論文の内容が重複しないように、ドラッシェは登頂時の観察に基づく浅間山のカルデラ構造の分析に、ナウマンは歴史的記録に基づいた噴火史の考察に特化した研究を発表することになったのではないだろうか。

4. 観光地化とスリルの消費

1870 年代の登頂記録からは、浅間山の学術的調査の進展だけでなく、東京から浅間山麓までの交通手段、案内人や現地での乗り物といったインフラや旅行者向けのサービスが次第に整備され、さらには登頂ルートが確立されてゆく過程をうかがうことができる。こうした変化を受けて、浅間山は 1880 年代半ばには観光地として確立されるのである。

1880 年代は、欧米人による日本国内の観光旅行が定着した時期であるが、それを示すひとつの画期となったのが、1881 年の『日本旅行案内』の刊行である[73]。同書は、横浜や東京といった都市部だけでなく、東海道や中山道、奥州街道を利用して行くことのできる本州の各地方と、函館や長崎などの主要な港の周辺地域をカバーした、史上初の包括的な日本旅行案内書として刊行された。同書が好評だったため、1884 年には、イギリスを代表する旅行ガイドブック出版社として知られるジョン・マレー社より増補版が刊行されることになり、それ以降 1913 年までの 30 年間に 9 版を重ねることとなる[74]。

---

[71] von Drasche, “Bemerkungen über die japanischen Vulkane,” S. 51-2.
[72] *Ibid.,* S. 53.
[73] Ernest Mason Satow and A. G. S. Hawes, “A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan,” in: *Collected Works of Ernest Mason Satow. Part 1: Major Works*, vol. 4 (Bristol: Ganesha Publishing, 1998/Tokyo: Edition Synapse, 1998).
[74] 長坂契那「明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック」、『社会学心理学教育学：人間と社会の探究』、第 69 号（2010 年）、101-15 頁。

同案内の著者のひとりであるイギリス人外交官のアーネスト・サトウ（Ernest Mason Satow, 1843-1929）は、熱心な登山家として日本の登山史に名を残している人物である[75]。そのため『日本旅行案内』では、富士山や浅間山、白根山や白山といった各地の主要な山々の登頂ルートも詳しく説明されており、登山好きの欧米人旅行者の需要に応えている。例えば浅間山については、追分からと沓掛から、さらに小諸からの 3 つの登山ルートが紹介され、沓掛からの登山が最も負担が少なく、小諸からのルートも難易度が低いと評されている。また、それぞれの登山ルートについても、目印や各ポイント間のおおよその距離、所要時間、飲用に適した湧水、見晴らしの良い場所から見える山の名前など、懇切丁寧な説明がつづられている。このように、同書は実用的な登山ガイドとして書かれていたのである[76]。こうした登山好きのためのガイドブックとしての『日本旅行案内』の性格は、1884 年の再版ではさらに強まる。この再版では、欧米人によるそれまでの登山活動が集大成され、イギリス人登山家のウェストンをはじめとする、登山を愛好する欧米人に日本の山岳部の魅力を知らしめたのである[77]。なお、初版の浅間山に関する記述の少なくとも一部は、サトウ自身の知見に基づくものである。サトウは同書の執筆準備の一環として、1877 年秋にイギリス領事館弁護士のフレデリック・ヴィクター・ディキンズ（Frederick Victor Dickins, 1838-1915）と沓掛から浅間山に登っているからである[78]。しかしサトウは、その 3 度に渡る日本滞在の間に各地で積極的に登山をしているので、浅間山に登ったのはこの時が初めてではない可能性が高い。

こうした観光旅行の定着に加えて、1880 年代に東京から浅間山麓までのアクセスが格段に改善され、さらには軽井沢が欧米人の避暑地として急速に発展したことも、浅間山の観光地化を押し進めた。上野から高崎までの鉄道が開通したのは 1884 年 6 月 25 日であり、さらに同年の 5 月 22 日には碓氷新道も開通している[79]。その結果、これまでのように徒歩や籠で急峻な碓氷峠を越える必要がなくなり、人力車や馬車で高崎から追分や小諸まで直接行くことができるようになった[80]。また翌 1885 年の 10 月 15 日には、鉄道が高崎から横川まで延伸し、1888 年 9 月 5 日には横川から軽井沢まで碓氷新道を通る鉄道馬車が開通した[81]。この結果、1870 年代には 2 日かかった東京から浅間山麓までの移動は、1880 年代中頃には 1 日に短縮されたのである[82]。

---

[75]『日本山岳会百年史 本編』、34-75 頁；山崎『登山史の周辺』、90-107 頁。
[76] Satow and Hawes, “A Handbook for Travellers,” pp. 229-32, 276-7.
[77]『日本山岳会百年史 本編』、42 頁。
[78] Ian Ruxton (ed.), Sir Ernest Satow’s Private Letters to W. G. Aston and F. V. Dickins: The Correspondence of a Pioneer（九州工業大学学術機関リポジトリ: 2008）（http://hdl.handle.net/10228/00006849）（2021 年 5 月 27 日ダウンロード）。
[79]『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』、60-3 頁。
[80] 同書。
[81] 同書。
[82] 東京から横川までの所要時間は約 8 時間、横川から軽井沢までは約 3 時間だった。所要時間については、ウェストン（青木枝朗訳）『日本アルプスの登山と探検』（岩波書店、1997 年）、21-2 頁を参照。

一方軽井沢は、1886 年にイギリス人宣教師アレクサンダー・クロフト・ショー（Alexander Croft Shaw, 1846-1902）が、そのヨーロッパ的な冷涼な気候と美しい景観に魅せられて夏季に滞在して以降、東京や横浜に居住する欧米人の避暑地として急速に発展する[83]。そして軽井沢で夏を過ごす欧米人の間で、浅間山は避暑地で気軽に楽しむことのできるハイキング先として定着したのである。1890 年代前半に中部地方の山岳地帯を探検したイギリス人登山家のウェストンは、1891 年に軽井沢にも立ち寄っているが、彼の記述からは、軽井沢の万松軒という宿屋が「洋風」の料理を提供し、浅間山登山の案内人を手配するなど、欧米人観光客向けのサービスを提供している様子がうかがえる[84]。この時にはウェストン一行以外に 2 人組のアメリカ人観光客も万松軒に泊まり、案内人の紹介を受けている。

このように観光地化が進んだ浅間山は、ウェストンのような本格的な登山者には物足りなかったのだろう。彼は浅間山登山を、その後に計画されている日本アルプス踏破の「足慣らし」と称している[85]。そう感じる欧米人登山者はウェストンだけではなかったようで、世紀末になると、より強烈なスリルを求めて夜間に浅間山に登る猛者が現れるようになる。上述のディキンズは避暑のために軽井沢に滞在した欧米人のひとりだが、1898 年の夏に彼を訪れたイギリス大使館の通訳生が、この浅間山のナイトハイクに挑んでいる[86]。ウェストンもまた、後年になって夜の浅間山に登っているが、その時の経験は「生涯忘れることができない」ものだったという[87]。闇の中、釜山の火口の「深淵の底に燃える火を覗きこんでみた」というが、彼の目に映った「この世のものとも思えない光景は、ひと目みたら誰でも生涯忘れることができないだろう」とその印象深さを述懐している[88]。

20 世紀になると浅間山は活動期に入り、噴火が頻発することになる。そしてついに 1911 年には、登山者が噴火に巻き込まれ死亡する事故が発生した。活動期に入った浅間山では、それまで繰り返されてきたような火口すれすれまで近づく行為は、以前とは比較にならないくらい危険なものになったのである。しかしそれでも、浅間山に登る欧米人は後を立たなかった。例えば 1908 年に発足したスポーツ協会である軽井沢運動会に、浅間山登山会という部門が存在したことからもわかるように、欧米人避暑客の間での浅間山登山熱は醒めなかったのである[89]。

その一方で 20 世紀初頭に入ると、学術調査や観光以外の目的から浅間山に登る日本人の存

---

[83]『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』、109-16 頁。
[84] ウェストン『日本アルプスの登山と探検』、22-8 頁。
[85] 同書。
[86] Ian Ruxton (ed.), The Correspondence of Sir Ernest Satow while he was British Minister in Japan (1895-1900) from the Satow Papers Held at the National Archives, Kew, London, vol. 1（九州工業大学学術機関リポジトリ: 2005）（http://hdl.handle.net/10228/00006846）（2021 年 5 月 27 日ダウンロード）。
[87] ウェストン『日本アルプスの登山と探検』、24 頁。
[88] 同書。
[89] この登山会の活動については研究が待たれる。『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』、10 頁、119-20 頁。

在が注目を集めるようになる。1904 年頃から学生の投身自殺が相次いだのである[90]。そうした若者が自殺を試みる場所として当初有名になったのは、日光の華厳の滝だったが、地元の警察が警戒を強めたことから、ほどなく浅間山の火口へとその場所は移った[91]。同時期には、阿蘇山のような他の活火山においても、若者が火口に身を投げるケースが相次いだ[92]。こうした風潮の中でも、火口見物のために山に登る欧米人は多かったため、投身自殺の現場に外国人の登山者が行き合うこともあった。登山家ウェストンの著作『極東の遊歩場』(1918 年) には、阿蘇山に登ったイギリス宣教会の宣教師 2 人が、火口に飛び込んだもののまだ生きていた 2 人の学生を発見し、彼らを何とか助け出そうと奔走する生々しい様子が描かれている[93]。この時の学生は 2 人とも救助されたが、1 人は両足の骨折のため数日後に死亡し、もう 1 人は片目を失明したが一命は取り留めたという。

終わりに代えて

浅間山は、1911 年に日本で初めて火山観測所が設置されるなど、国内では最も早くから学術的な調査が進んだ火山である[94]。それはひとつには、開国以前から国外の研究者に日本を代表する活火山のひとつとしてその存在を知られていたために、明治期の早い段階で欧米人地理学者や地質学者による学術登山が実施され、研究論文が刊行されたからだろう。交通手段が未整備な明治初期でも、東京から浅間山麓までは 2 日程度で行くことができた。こうした東京からの距離の近さもあり、浅間山の地理学的・地質学的な調査は 1870 年代に急速に進展したのである。

ラインやドラッシェ、ミルンやナウマンといった研究者によるこうした先駆的な研究は、同時代の東京や横浜に在住する欧米人間の人的ネットワークに支えられたものだった。1860 年代後半から 1870 年代にかけて、日本に滞在する欧米人のコミュニティでは、社交と情報交換の拠点としてクラブや協会といった自発的結社の設立が相次いだ。こうした団体は、講演の開催や定期刊行物の発行などを通して、当時まだ欧文での情報が不足していた日本の各地域や分野に関する見聞や知見を集積し、共有するインフラとして機能した。ラインたち欧米人研究者の浅

---

[90] 例えば、「学生噴火口に投ず」、『読売新聞』(1904 年 4 月 8 日)、朝刊、3 頁 ;「馬鹿者又出ず (前橋)」、『朝日新聞』(1906 年 7 月 13 日)、朝刊、2 頁 ;「浅間山の噴火口に投身す」、『読売新聞』(1906 年 9 月 11 日)、朝刊、3 頁。

[91]「自殺と殺人 (承前) 片山医学博士の意見」、『朝日新聞』(1908 年 6 月 10 日)、朝刊、6 頁 ; Walter Weston, *The Playground of the Far East* (London: John Murray, 1918), pp. 139-40.

[92] Weston, *The Playground*, pp. 139-40.

[93] *Ibid*.

[94]『軽井沢町誌 歴史編 (近・現代)』、208-13 頁。

間山への旅は、そうした欧米人コミュニティ内で蓄積されたノウハウに支えられて実現したものであり、彼らもまた新たに得た情報を後続の研究者や旅行者のために共有することをよしとしたのである。このように、東京や横浜の欧米人コミュニティにおいて、社交と学術交流の間の壁が低く、職業や分野、さらには国籍の違いを越えて滞在者が知見を共有していたことを確認できたことは、本稿の収穫のひとつだろう。

しかし当時の浅間山は、何も学術的関心だけを集めたわけではなかった。鳴動する火山の迫力を体感できる稀有な場所を訪れようと、開国直後から山頂の火口を目指す欧米人が相次いだのである。こうした登山者の行動の背後には、大自然の圧倒的な力を目の当たりにすることで心揺り動かされたいと希求する、ロマン主義的な冒険心が見え隠れする。このロマンチックな冒険心は、パークス夫妻やサトウといったスポーツ登山者だけでなく、ラインやドラッシェといった学術的な探究のために登頂した者もまた共有していたと言えるだろう。彼ら研究者の記述からも、自然の荒々しいスペクタクルに驚嘆し畏怖する様相をうかがうことができるからである。このようなロマン主義的な「崇高」の美学においては、今にも噴火しそうな火口の縁にたたずんでその奈落の底をのぞき込むという行為は、その剣呑さゆえに価値あるものとみなされた。つまり、活火山浅間山は危険で恐ろしいからこそ多くの欧米人旅行者を魅了したのである。そして 1880 年代に入り、国内の交通網が整備されて東京から浅間山麓までの移動時間が短縮され、さらには軽井沢が欧米人の避暑地として発展すると、浅間山は夏期のハイキング先として観光地化が進んだ。そうした同山の人気は、火山活動が活動期に入り登頂の危険性が増大した 20 世紀初頭以降も、衰える様子を見せなかったのである。